令和8年度知事定例記者会見［抜粋］

令和8年5月22日　知事定例記者会見［抜粋］

〇日経新聞

ありがとうございます。

もう一つなんですが、西九州新幹線の延伸問題について、水嶋次官と会談をこれまで重ねてらして、たしか 4 月の時点ではまた 5 月の連休明けにでも意見交換をしたものをさらに進化させていく話合いをしていく予定だとおっしゃっていました。ただ、それぞれの方のお話を伺っていても、知事はストライクゾーンが、その話合いの中でのアセスの提案に対してのストライクゾーンが狭過ぎる、高過ぎるということで再考をお願いしたというか、もう一度こちらの意見を伝えた、そして次官のほうは様々な機会に、本当にストライクゾーンは自分たちが真ん中だと思っているところに投げられていて、決して佐賀県側が想定している下のほうのゾーンは狙っていないと。それをさらに援護射撃するように、JR 九州のほうもストライクゾーンはここだというような言い方をされています。なので、もちろんいろいろな協議の中のこれは一つの事項なのかもしれませんが、今後の話がどうやってまとまっていくのかという方向性と、次回の会談というのはいつ頃になりそうなのか、展望を教えてください。

〇知事

長谷川さんがそこまで御案内のとおりというところに一つのまだ課題があるのかなと私は思っていて、そもそもこの私と水嶋次官で、いわゆる 2 人で話をしているわけです。誰も入っていないです。ですので、当然、議事録も何もなくて、本当に 2 人だけの部屋です。最初に申し合わせたというか、話をしたのが、冷静な環境というか、静かな環境でということでやっていきましょうと。外でいろいろ、一つ一つについてああだこうだという話になると、なかなかまとまるというか、何か成案が出る方向になかなか行きにくいのでという話だったと思うんですけれども、どうも途中途中で国のほうから様々な情報が出てきて、こちらが、佐賀県にも現場のほうではいろんな意見があるんだよという一つの例で出したようなものがそのまま外に出ていったり。

ちなみに、私は国のほうから頂いた資料は一切出していませんので、何かその辺りが、こういう状況になっているというのはとても残念だなと思っています。でも、いろいろああやって主張をされてしまうと、私はずっと黙っているというと、何か誤解もされるのもあれなので、私は全てはしゃべりませんけれども、私の話せる、話しても大丈夫だという範囲でお話をすると、ご覧のとおり、この西九州新幹線の問題というのは、いろんな財政負担、これでいいのかとか、在来線はどうなっていくのかとか、それこそ、フルでやるとしたときのルート、どんな形になるんだろうかとか、それに合わせて、北部九州はどういうふうに結びついていくのかとか、そういう地域振興の問題だとか、い

ろんな問題があるというのは常々申し上げてきて、それについては水嶋次官ともいろんな意見交換をしました。

だから、今の財政負担スキームに課題があるねということなどは意見が一致したりもしました。ただ、それについても途中の何か、次官の会見か何かで法改正をすることはしないって、何かぱしっと切っていましたけど。

それとか、いろんな話をしながら、ただ、国のほうから、やっぱりアセスという話があったということですね。私は、議論を深めると言っているんですよね。議論を深める、だから、もし仮にアセスなくはないとか私も言ったことがあるような気がするんですけれども、議論を深めていくという意味で、という趣旨でお話は申し上げているわけですけれども、ただ、この段階で結論ありきみたいなルート設定がなされるというのは、私の中にないわけです。本当に多くの可能性という中で議論が深まっていけばいいわけで、私は別に、どこかのルートを推奨しているとかそういうことではなくて、やはり県民の中にもいろんな意見もあるし、それぞれで全く違った効果も出てくるので、さらに検討を進めていけばいいと思うんです。それこそ、北陸は一旦決まったのに、まだ 8 個ぐらいでやっているんですか。ですよね。

だから佐賀県は、もともとこれは、何度も申し上げますように、本当はフリーゲージでもう終わっている話を、国がそれができないということでこの話になっているわけですから、やはりこれは交渉なので、お互いが、どこが国として譲れるところでというところがあって初めて交渉というのは成り立つわけなんですけれども、やはり結論ありきというふうな形というのは、交渉になかなかなりにくいところがあるのではないかなと思っています。それでもいろんな話はしています、いろんな観点から。ただ、今のところなかなか交渉というか、そういうふうな形にはなりにくいところがあるのかなと思いました。

それで、国のほうから、今度 26 日だったですかね、政策提案のときに話をしたいという申出がありましたので、どういう話になるか分かりませんが、お話を聞きに行きたいなと思っております。

なので、ここで議論を深めるという意味では可能性があったんですけれども、もしそれが、もうここで決めてしまうというのに等しいような前への進め方、いわゆるアセスであるとしたならば、私にとってそれはなかなか難しいということなんです。

〇日経新聞

ありがとうございます。

26 日の政策提案の中で、国交省マターであったりとか、いろいろある中で、国交省の該当する部署としては、必ずしも水嶋さんではないと思っていたので、それとは別に、日程の中で 2 人で話される可能性があるということですか。

〇知事

国土交通省さんにもそれぞれ局長さんとかそれぞれ話ししたいことが、提案させていただきたいことがあるわけですけれども、それとは別途、2 人で話す時間を取りたいと思っております。

〇西日本新聞

新幹線に関連してになるんですけれども、先ほどちょっと話があったんですが、水嶋次官が弊紙のインタビューに先日答えていただきまして、その中で、今まで話に出ていた佐賀空港を通るようなルートに関してなんですけれども、南側を含めたアセスについては少し否定的な態度を取られております。先ほど話ありきで進めるのはちょっとよくないのではないかということでしたけれども、県としてアセスを進めていく方向での協議を進める中で、どういった範囲、県はアセスしてほしいとか、県としてどういった求め方をしていくのかというのがもしありましたらお伺いしてもよろしいですか。

〇知事

少なくとも、今、国のほうがというのはほとんどルートをここで決めてしまうに等しい幅の狭さだと思っているんです。ですので、我々は議論を深めると言っているんです。議論を深めるのに、この段階でそれを絞るということではなくて、結論としてどうなるかというのは分からない。だけれども、いろんな意見があるということを申し上げているわけです。だから、いろんな意見ということを、現場のことを分かっていらっしゃらないのかなと僕は思ったので、国はそれこそ、ありきみたいな形でおっしゃるところがあるから。でも、やはりいろんな意見があるので、これは新しい話だから、我々としてみると、議論を深めるということは大事だろうと思っているんです。なので、そういう様々な主張というのはもっと後でと思っていたわけなんですけれども、この段階で、狭いところでアセスをやるっていうことは、ここで結論を決めてしまうに等しいと思うわけです。分かりますか、言っていることは。

〇西日本新聞

ありがとうございます。

26 日に水嶋次官と会われるということでしたけれども、一応、ずっと言われているのが、夏で水嶋次官が一応 1 年になられるというので、異動はまだもちろん決まっていないんですけれども、そこも一つ、夏という区切りがあるのと、概算要求とかも含めて、やっぱり夏までにどういった結論を出すのかというのは意識せざるを得ないかなと思うんですけれども、県としての描いているスケジュール感みたいなものがあれば教えていただいてもよろしいですか。

〇知事

これは我々、スケジュール感って持ち合わせていないので、真摯に向き合っていきたいと。これはやっぱり佐賀県の誇りにかけて、まっすぐに向き合っていきたいとずっ

と私は思っています。ですので、期限がどうだということではなくて、常に門戸を開いてというか、だから、26 日も時間くださいということであるから、はい、分かりましたということでありますし、その後の展開も分からないけれども、いずれにしても、こういう形でこの議論は続けていきたいと思っています。

〇西日本新聞

夏というのは特に意識し過ぎずに議論を進めていくという理解でよろしいですか。

〇知事

はい。

〇読売新聞

すみません、私も鉄道から伺いしたいんですけれども、26 日の件なんですけれども、今の状況として整理すると、アセスについて提案が一度県にあって、それが狭いというところで、その修正案、もっと南側をフォローしてほしいという形で提案をされたという理解、ボールを向こうに投げているという理解をしているんですけど。

〇知事

そうそう。もともと、僕らはそうずっとその意見なんで。

〇読売新聞

これまでの今の他紙とかを見ると、水嶋次官の発信を見ると、どうしても南側に対してすごくネガティブな発言を繰り返しているので、なかなかその修正案を受け入れる状況には見えないんですが、一応この提案をしたいというところでアセスについての修正案に対する回答が 26 日にあるイメージでしょうか。

〇知事

それは国に聞いてください。

〇読売新聞

少なくとも知事はこの南側が加味されない形でルートがある程度限定されるような案についてはのめないっていう、ほかの条件が提示されても、このアセスの範囲について南側がフォローされてなければ、それはのめないというスタンスで臨まれるのか。

〇知事

はい。こんな短期間にそこを決める話じゃないと思っています。

〇NHK

改めて新幹線の件です。知事と水嶋次官のご面会を度々取材していく中で、率直な意見を交わされているんだ、いい関係なんだろうなと勝手に思っておったんですけれども、一方で、アセスの提案を受けて以降、この前のぶら下がりの取材のとき、言葉

のほうと表情が少し変わってきたなという印象を勝手に持っております。
この間のいろんな報道であるとか、資料が出てしまったとかいうところで、そのお二人の関係性、そこの信頼関係に何か変化とか、知事のほうでも少し思っていることというのが何か気持ちの変化というのがあったんでしょうか。

〇知事

まず、水嶋次官に関しては敬意を持っておりますし、信頼関係は続いていると思っています。
ただ、今回、この問題が一つのキーになったのも、全体、先ほど言ったように、アセスというか、ルートの問題だけ話していたわけじゃなくて、財源だとかいろいろな話をしている中で、アセスでさらに議論を深めていくということを話していく中で、どうもやっぱり限定的に考えておられることがどうしても引っかかるし、そこって早晩、アセスまで、もしアセスということになるならば、そこはどうしても引っかかるところであったので、なので、私のほうからそれは連絡を差し上げて、やっぱりここはちょっと、ほかの部分は、ある程度整理がつく可能性もあるけれども、ここが分かれたままだと、ほかのほうに行くことを幾ら議論しても、つっかい棒になる気がしたんですね。なので、これについては私が問題提起したら、かなりそれについて強い反応が出てきたので、ああ、あれって、ここは結論ありきということなのかなというふうに思いますし、もっといろんな議論というのを信じて、柔軟に対応していただくというもあっていいのかなと思います。
特に運輸省さんのところというのは、どうしても許認可が多いところであるので、何となく分からないではないんだけれども、みんなで決めていくというか、何かそういう文化があっても、一旦決めたから、もうここから動かないとかそういうことではなくて、していくようなところがあったらいいのかなという感想を持っています。

〇NHK

もう一点だけ。アセス、もちろん県が主体となってアセスをやる、ほかの事業とかでやることもあるとは思うんですけど、やっぱりこのアセスというものの性質というのは、ある程度、その規模とか、範囲というものを決めてやるというのが一般的かなと思うんですけれども、一方で今回のこの新幹線に関しては割と広い幅の中でのアセスを県としては求めていらっしゃる、この辺りの整理というのは、知事はどのようにされていますでしょうか。

〇知事

それをアセスというのかは、私はよく分かりませんけれども、いずれ、これが話が進めばね、どこかのルートになっていくということになるんでしょう。ただ、今の段階で、そういった意味でのアセスというところに行く環境にはないと私は思っていますし、国交省さんに非常にいいなと思っている点を言うと、県のオーケーがなければアセスはやらないって、それは前から言っていただいているので、そこは非常に地域をちゃんと大

切にしているところでもあるので、なので、ここに関しては、やはりしっかりさらに話し合っていく必要があると思っています。

〇NHK

次官に言われるアセスと、この件に関するアセスというのは、やっぱり質の違うものだということですか。

〇知事

私はそこまでぎりぎり詰めたわけではありませんけれども、少なくとも、幅の狭いところでというところでは難しいということなんです。だから、言葉に落とし込むかどうかというのは、いわゆる工学上のアセスというものなのかどうかというところは、これがある程度話がつけばさらに検証していくことになるんだと思います。

北陸の小浜−京都にしたって、幅あると思うんですよ。1 つこの道って決まっていないと思うんです、ですよね。なので、そこをどういう形で進めていくのかというのは、ある程度そこが、もしある程度の合意がついた後に検討されることかなと思っています。

令和8年4月24日　知事定例記者会見［抜粋］

〇読売新聞

今回の発表と関係ないところで 2 点お伺いしたいんですけれども、まず 1 点目は西九州新幹線の関係で、水嶋次官と 2 人で会談されていますけれども、先日の会談のところで、水嶋次官がルートを定めない形でのアセスを提案しましたと、知事のほうにボールを投げましたというふうな発言されていました。それについての受け止めと、今度、5 月に会われるというふうなお話もありましたけれども、今度の 5 月について、何かしら結論を出そうというお考えなのか、それともまだまだ議論というのはまだ続くのか、その辺の今後のお考えについてお尋ねします。

〇知事

今交渉中なので、なかなかコメントが難しいですけれども、お尋ねですので、自分なりにお話しさせていただくと、あの後、水嶋次官が会見で、真ん中に球投げてきたっておっしゃっていましたけど、私から見るとかなり高めだったと思っているんです。高めであったんだけど、私的には、その後、バットに当てて取りあえず真正面に打ち返したつもりなので、今度はまた水嶋次官がそれをどうまた投げてくるのかなとか、いろいろやり取りをその後も 2 人の間でやっているので、そういった状況などを踏まえて今後どうなっていくのか、5 月にお会いするときにはどういう形で迎えるのか、なかなか大変です。改めて今日は新しい方もおられるので言いますと、国はフル規格ということでありますので、フルの議論、フルでやるとしたならばということで話をさせていただきます

けれども、佐賀県はフルって手を挙げて決めたわけでもありませんし、そのほかにも在来線だったり、財源の問題だとか並行して横たわっている問題はずっとそのままでありますから、そういったことがある程度整備されてこの話はまとまる可能性があるわけでありますので、本当に一つ一つだと思います。そこに光が――光というかですね。佐賀にとって光かどうか分かりませんけれども、何か策ができるのかどうか、そういうところを今お互いで模索しているということでございます。

○NHK

ちょっと新幹線の話に戻ってしまうんですけれども、先日、水嶋次官とお会いになって、ルートを縛らない形での環境アセスメントの提案を受けたことなんですが、改めて知事として、その提案を受けたときの印象であったり、受け止め、どのように捉えたか、まず教えていただけますか。

○知事

私はかなり高めに来たなと。ちょっとバットに当たらないんじゃないかなと思ったんですけど、私はね。なので、真ん中に投げたとおっしゃられたから、そこに若干のずれがあったのかなと思いますし、私はそれを水嶋次官に電話して、ちょっとそれは高め、そのときも言ったんですよ、ちょっと高いって。でも、やはり高めなので、もうちょっと真ん中にしませんかという話をしているんですけど、そういったことも含めて、それぞれに考え方があるので、そこがこの今言った一つのファクターでも、ただ、これは結構大きなファクターだと思うので、最初にこのファクターがある程度解消できるのかというところを今やっているということですね。

○NHK

6 年ほど前に、国交省が 5 つの整備方式に対応できる形で環境影響評価の提案があったかと思います。そのときとの提案の違いというのはどのように知事としては捉えていらっしゃいますでしょうか。

○知事

そうですね、やはり私は、この問題って、オスプレイのときにも全体像、将来像を県民と共有しながらやっていくということで、しっかり時間をかけてやったわけですけれども、新幹線の問題も、県議会だってすぐやればいいんだよと言う方もおられましたけれども、問題は、佐賀県に対する重大な、深刻な影響、そして、今の鉄道環境がむしろいいという状況の中で、そこに無鉄砲に飛び込んでいくリスクっていうのをしっかりとみんなが共有しないといけないなっていうふうに思いましたので、あの当時、そこでアセスにいってしまうということの、さらにどんどん進んでいくっていう雰囲気になることを大変恐れたわけなんです。

ただ、ずっとこの間、佐賀県が主張している間に、北陸だとか、北海道とか、今の

状況見ていただくと、私が言ってきたことっていうのが蓋然化してきたと思いませんか。そんな安易な話じゃないんだと思うんです。で、ただ、北陸もある程度の帯でアセスやっているので。例の小浜京都ルートもやっている途中でということでもあるし、ある程度、もちろん、北陸と違って僕らは意思決定していないけれども、それでもそういった、今これだけみんなが新幹線問題について分かっているし、水嶋さんも、今の負担スキームはやっぱりおかしいと、このままじゃ、佐賀県が全額払うっていうシステムがおかしいっていうのは分かっていらっしゃるので、そういったこと、こういう環境の変化も含めて、いろいろやれるところを少しでも進めていきながらという部分が変化してきたんだというふうに思います。なので、少しずつこの問題っていうのは全国的にも理解が深まってきたので、何とかいろいろ、前に進めるところがあったら進めていきたいっていう気持ちはあるので、ただ、それでもやはりなかなか難しい課題があるというのが今の状況です。

〇佐賀新聞

新幹線の関係でですけど、先ほどもお電話でということでしたけれども、この前、会談が終わって、お電話で数度とか、何回かそういうやり取りがあったという理解でよろしいでしょうか。

〇知事

あの――いいか、そこは。私が返しただけです。

〇佐賀新聞

なるほど。申し訳ない。

〇NHK

また新幹線の話で恐縮です。知事は、水嶋事務次官は真ん中に投げたつもりだ、でも、自分は高めだと思ったという話をされたんですけど、改めて具体的にどういう意味合いがあって、どういうふうに応じられたのか、知事はどういうおつもりでいらっしゃるのかというのを改めて教えていただけますか。

〇知事

これは交渉内容なので、ただ、どうなんだろう、水嶋次官は何とおっしゃったんですかね、真ん中の球っていったときに。

〇県職員

ストライクゾーンで真ん中のストレートを投げた。

〇知事

それは何についてとは言っていないのか。

〇県職員

はい。

〇知事

一般的に言っているわけね。

〇県職員

はい。

〇知事

だから、そこから先はちょっとお互いの話なので、恐らくこれからもいろんなボールの投げ合いは続くと思うので、もうちょっと冷静に見守っていただきたいなというふうに思います。

〇NHK

ルートを絞らない形でのアセス提案を指して、そういう水嶋次官は真ん中に投げたという認識で大丈夫ですか。

〇知事

いろんな要素があるわけで、2 人で話した中でも。ただ、一つ何というんでしょうか、大きな課題が――大きなって私にとっても大事だし、国にとってはどうなのか分かりませんけれども、そこの部分は合意はしないと前に進みにくいかなと思っているので、何というんでしょう、いろんな課題があるんですよ。ただ、一つ、お互いが議論する中で意見がなかなかかみ合わない部分について今、議論をしているということで大体分かっていただきたいと思います。

〇読売新聞

私も電話の話で恐縮なんですけど、まず認識だけちょっと、具体的な中身はちょうどやり合ったところだと思うので。お電話でボールが高いということで、もう少し真ん中にしてほしいという話は、これはアセスについて何か具体的な回答をしたという理解なのか、それとも、この議論が続いている中で何か具体的な条件提示みたいなのをされたのかという、ちょっとその辺り……

〇知事

いや、そこはちょっと難しいですね。水嶋次官に今度聞いていただいたらいいかなと思うんです。私は今日大分頑張って答えたので。ただ、冷静に見守ってほしいねというのは水嶋次官と私との共通の思いなので、なかなかここから先はですね、ある程度、もうちょっと、今回の議論はまだ始まったばかりなので、見守っていただきたいと思います。

〇読売新聞

先ほど答えにあったように、やはりここについて合意しないと話が前に進まないと思っているというのは認識として……

〇知事

そう。一つの大切なファクターだと。